

■ はじめに

鹿部保育所は1975年（昭和50年）同和保育所として古賀市に設立されました。

毎年、職員研修で保育所設立当時の経緯や地域の方々の思いなどを共有し、職員一人ひとりが人権意識を高め、子ども「一人ひとりを大切にすること」を保育の基本にしています。また、乳幼児期からの人権意識を育むために、毎月のテーマ・ねらいを設定し、地域や家庭、各関係機関との連携を大切しながら、「人権を大切にすることを育てる保育」を目指してきました。

現在（2022年10月末）、0歳から5歳まで134名の子どもたちが生活しています。保育所で過ごす子どもたちは遊びや生活の中から日々、たくさんのことを吸収したり、学んだりしていると感じます。だからこそ、この社会状況が目まぐるしく変化する時代、この先様々な困難が予想される未来を生きる子どもたちに、力強く生きてほしいと強く願うようになりました。

まず、自分たちの保育の見直しを考えていた時に「子どもの自尊と自律を育てる保育環境」の研修に参加する機会があり、保育内容や環境等具体的な保育の見直しをするきっかけとなりました。

そして、2019年度より、福岡県人権・同和教育研究協議会の乳幼児教育にかかわる研修指定園として、勝山結夢さん（NPO法人国際臨床保育研究所）に研究協力指導、助言を頂きながら、「子どもの自尊と自律を育む保育環境」について学びや実践を進めているところです。本日はその取り組みを報告いたします。

■ さくら組（4歳児クラス）の取り組み

さくら組は、新入園児もなく29名全員が一緒に4歳児クラスに進級しました。4月は絵本・ままごと・積み木・電車・LaQ・机上遊びなどのコーナー（遊びの空間）で興味津々に過ごす子どもたちの姿がありました。しかし、LaQやままごとコーナーでは、床に玩具を広げて遊ぶといった片付けが出来ない等の課題も見えてきました。ものを大切にすること、だれとでも仲良くすること、困っている友だちに手を差し伸べることができることなどをめざして、1年間の取り組みをスタートしました。

○■ 保育環境の見直しから

保育室の中央にままごとコーナーを設置しました。対面キッチンにしたことで、すぐにお店屋さんごっこが始まりましたが、食材やお皿など雑に扱う姿が多くみられました。

家族ごっこ（ままごと）では、人形の服を脱がせては床に放置したり、振り回して遊んだりする姿がありました。そこで、サークルタイムで人形の名前を決めることにしました。名前を決めたことで人形にも愛情がわいてきたようで、「さくらちゃん、ご飯できたよ」など少しずつですが一緒に遊べるようになってきました。また、6月の人権のテーマが「家族」なので、役割バッチを作ってみました。役割のバッチをつけ、役割の可視化をしたことで、今まで曖昧だった遊びから役になりきって遊ぶことができるようになってきました。一方で遊びのルールが明確になってきたことで、今までふざけて遊んでいた子どもたちが他のコーナーで遊ぶようになってきました。

また、ままごとコーナーを部屋の隅に配置した事でキッチンなどの高さのあるものが無くなり、全体が見渡せるようになったことで、全体的に落ち着いて遊べるようになったと思います。

〇4・5月テーマ「芽生え」の取り組み

保育のテーマを据える中で、まず「菜園活動」を始めました。もう一つは昨年度の年長さんから引き継いだカブト虫の幼虫の観察をしました。4月初めは虫かごの中の幼虫も見えず、図鑑を見ては「どんなものが出てくるのだろう」と子どもたちは興味を示していました。

サークルタイムで一度虫かごをひっくり返し、中の様子を実際に観ました。すると中には1匹の大きな幼虫が入っており、「うわぁ、すごく大きい」「こんなにたくさんだったんだ」など驚きの声がいっぱい聞かれました。いざ虫かごに戻そうとしたときに、図鑑で見た「トイレトペーパーで蛹室を作ると中の様子が見える。」とのことで実際にトイレトペーパーの芯に入れ観察を始めると、子どもたちは虫かごの周りに集まりじっと観察をしていました。しばらくすると、蛹室から幼虫の姿がみえなくなりました。どうしていなくなったのかな？」と尋ねると「お家が狭かったっじゃない？」と言い、「どうしたらいいかな？」と問いかけると「遊ぶところがないけん、トイレトペーパーで滑り台をつくったら？」「ご飯を作るところもいるっじゃない？」と沢山の意見が出てきました。

また、幼虫が地表に出てくると「退屈だから楽しいことないかな～って探しに来たんじゃない？」「おなかすいたよ～って言いに来たんじゃない？」幼虫が潜っていくと「お家にご飯を食べに帰った」「買い物が終わった」など幼虫の生活が自分たちと同じように過ごしていると感じている姿がほほえましかったです。

幼虫が蛹になり地表に姿を現したのですが、残念ながら成虫になることなく死んでしまいました。生き物が死んだら空に行くという子どもの声から、保育士が「天国に行けるように土に埋めてあげよう」と伝えると、「天国にはエスカレーターで行くとよ」「いや階段で行くとよ」「えっ、エレベーターじゃないと？」と天国への行き方について話す姿も見られました。「成虫にならなかったね」とあきらめ、虫かごの土をひっくり返すと中から2匹のメスのカブトムシが出てきました。子どもたちはいないと思っていたからか、成虫を見ると「うわぁ～おったー」と大喜びでした。毎日昆虫ゼリーをあげ、図鑑を片手に「おなかすいたんじゃない？」「ひっくり返ってしまったよ。大丈夫かな？」など、気づいたことを保育士や友だちに話しながら命の大切さに気付いていきました。

さくら組で成虫になったカブトムシはメスしかおらず卵を産むことはできませんでしたが、ひまわり組（5歳児）が育てたカブト虫はオス・メスがおり、幼虫へ育てていきました。来年度も引き続きこの取り組みを継続し、「命の尊さ」だけでなく、「育てる喜び・大変さ」、「生き物が生きるために昆虫や植物を食べて生きているということ」、図鑑などで調べる主体性、最後まで世話をするなど継続する大切さなども伝えていきたいと思います。

〇Aさんと集団遊び

Aさんは、すみれ組（3歳児）の時は友だちとの関りも少なく、集団遊びでは保育士と一緒に手をつながないと動けなかったり、生活面でも何度も声掛けをしないと行動できなかったりする姿がありました。

さくら組に進級し、ごっこ遊びでは無言で持ってきて保育士の問いかけにうなずくだけでした。自分の話したいことは保育士によく話しかけてくれます。保育士からの問いかけや全体での発表になると話せなくなり、保育士が代弁すると全てうなずき、視線も合わなくなることが多くありました。自分の気持ちを素直に表現してもらいたいと思い、Aさんにたくさん話しかけ関わりを持つようにしました。

Bさんと仲良くなったAさん。2人で会話をしながら遊ぶ姿が見られるようになって保育士への依存も少なくなり、自分の気持ちなどを表現する姿が見られるようになってきました。このように変わっていくには次のようなできごとがありました。

Aさんにもクラスのみんなと遊ぶ楽しさを感じてもらいたいと思い、「イス取りゲームをしよう」となげかけました。子どもたちは「やったー」と喜び子と「負けるのが嫌だからしたくない」とつぶやく子もいました。そこで、「座れなかったお友だちは、残念ポーズをして、また参加できる」と排除方式でなく継続方式のルールにしました。その中でAさんは、ルールが理解できないのか頑なに参加しませんでした。保育士が手をつなぐと一緒に歩いて参加しますが、細かく動きを支持しないと動けない姿が何度も見られました。おっとりした性格のAさんなので、なかなかイスに座れず楽しくないのではと思い、みんなと一緒に楽しめるよう「一人のぞうさん」という集団遊びを試してみました。すると、競走ではないからなのか、友だちに誘われると初めは保育士と一緒に参加し、2回目になると保育士が側にいなくても自分から参加することができました。次の日は自分から「先生、(一人のぞうさん)またしたい」と要求してくるほど楽しかったようです。保護者にもイス取りゲームでのAさんの姿は話していたため、「一人のぞうさん」の話をすると一緒に喜んでいただきました。何度か「一人のぞうさん」を繰り返した後、イス取りゲームをしてみると嬉しそうに歩き、自から参加するようになりました。また、イスに座れなくてもBさんと笑顔で顔を見合わせ「残念」ポーズをするなど、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを少しずつ感じてくれているようでした。

運動会が終わり、色々なことに自信がついたのか、イス取りゲームをすると今度はイスに座ることができ、すごくうれしそうに周りの友だちにハイタッチを求める姿も見られました。Bさんだけでなく、少しずつほかの友だちとも遊べるようになってきており、「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼう」と声をかける姿が増えてきました。今後も、いろいろな遊びの中で友だちとの関わりや、じっくり遊びこめるような遊びの空間づくりや集団遊びなども工夫していきたいと思います。

■おわりに